

2023 年度（令和 5 年度）学校経営の方針 【学生募集の履歴から見た経営方針】

2023.4.3 悠久山栄養調理専門学校 井上 恵

4 年度は、コロナの様相が落ち着く傾向となり高校生の県外志向が上昇、消費者物価指数上昇のため大学よりも専門学校志向が強まった。本校の学生募集にとって前者は向かい風、後者は追い風となった。直近 6 年間の学生在籍状況は以下の通りである。

		直近 6 年度分 年度初 在籍状況					
		平成 30 年度	令和 1 年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
		2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
新入生	栄	29+1(留)	15	19	26+3(テクノ)	25+3(テクノ)	29
	専	22	26+1(留)	13	16	22	17
	調	25	13+1(留)+6(転)	14+2(転)+3(テクノ)	13+1(転)+6(テクノ)	10+4(テクノ)	11+3(テクノ)
	計	77	54+8=62	46+5=51	55+10=65	58+6=64	57+3=60
在校生	栄 2	25(6喪失)	20(10喪失)	13(2喪失)	18(1喪失)	28(1喪失)	27(1喪失)
	専 2	15(2喪失)	20(2喪失)	23(4喪失)	10(3喪失)	15(1喪失)	20(2喪失)
	計	40(8喪失)	40(12喪失)	36(6喪失)	28(4喪失)	43(2喪失)	47(3喪失)
年度初 在籍総数		117	102	87	93	107	107
※喪失=退学、転科等							
転科留年テクノを除いた 新入生		76	54	46	55	58	57
転科留年テクノを除いた 在籍総数		109	95	82	83	97	101

令和 3 年度は県内高校 3 年生在籍数が前年度より 1 3 0 0 人減少したが、4 年度初の在籍数は上昇をみた。4 年度の高校 3 年生在籍数は前年度とほぼ同じという状況なので、「ここは攻めの姿勢で」と考え募集要項を大幅リニューアルした。結果的には、前記の向かい風と追い風で相殺の状況である。

すなわち A O と指定校、特待生出願が増え高校生の反応に手ごたえを感じたが、一般や社会人が減少し、結果として 4 年度と同数の在籍数となり、顕著な数字には表れていない。

高校の進路担当教諭からのアドバイスによると

○募集要項の浸透には最低 2 年かかる 高校 2 年生に周知徹底すると 2 年後に成果がでる

○地道で親身な学生指導、学習上の効力感から発出する口コミや評判が募集に影響する

これを参考に、6 年度用募集要項をさらに微修正し学生募集に取り組む。

なお、令和 5 年度県以降の高校 3 年生は漸減していく。見通しは明るいとはいえない。

【高校生の在籍絶対数が減る状況でどのように学校を経営していくか】

これは構造的課題、とりわけ**学校外の構造的課題**である。学校だけの取組で大きく改善することは易しくない。この状況で考えられる着実な方途は

「収入に見合った支出」ひいては「その支出に見合った学習活動」を組織することである。

すなわち、「事業活動収支をプラスにすること」、少なくとも「事業活動支出から減価償却を除いた場合の収支をプラスにすること」である。事業活動の教育活動収支損益率は令和 4 年度予算で -1.3%、減価償却を除いた損益率は 17.3%のプラスである。これをそれぞれ 5%、20%くらいを目処に教育活動と支出をよく見なおしたいと考える。

換言すると、**学校運営全体の構造化**である。まずは、学園の予算作成において以下のようなパラダイム変換の必要性がある。

【これまで】 学校の予算要望⇒ヒアリング(≒調整)⇒予算立て **学校が「収支に無頓着」になりがち**

【井上私案】 収入見込み提示⇒事業活動収支を赤字にしないような予算配分を学校で考える

◆教職員の育成について

教職員の採用と育成が引き続きの課題、とりわけ管理栄養士育成が大きな課題である。地道な求人と育成、ならびに O J T が必須である。

授業について学生の評価および常勤教員の自己評価を集計した。その結果からは、現在の常勤教員の取り組み状況はおおむね合格ラインといえるものだった。さらなる改善が求められる。

1 喫緊の課題としては

引き続き「学生確保 充足率の向上」を目指す。本法人の収支に直結するからである。このために必要なことは「力のある学校づくり」であり、これを学校経営の中心におく。

「力のある学校」とは「学力を保証する学校」である。本校における学力とは、栄養士あるいは調理師としての知識と技術ならびに態度である。

2 学生募集状況の変遷

別紙参照

3 学生募集の成否を握るもの

とはいっても、新入生数は私たちの努力や取組だけの影響で決まるわけではない。県内高校3年生の人数の影響はもちろんのこと、景気や感染症の影響も受ける。こちらの取組の良否ではなく、決め手はカスタマーである高校3年生や本校に関心を寄せた人たちである。その意味では受動的なものである。

それではどうするか。

まずは、専門職として「力のある職業人」であるとともに、チームとしての力を向上させ、かつ「収入に見合った支出」を考え「勤務上のキャパシティ（身体頭脳感情）を逸脱しない業務の推進」に注力することであろう。ここでの専門性とは、まずは「栄養士あるいは調理師、または事務担当者」としてのこれがあり、加えて「学生を対象とする援助者」としてのそれ、この二つを兼ね備えたものである。

先般の学校評価はみなさんの力の向上を示唆するものであった。今年度も地道に努力していこう。